



Title	日本脳炎とワクチン
Author(s)	奥野, 良臣
Citation	makoto. 1976, 14, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86205
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本脳炎とワクチン

大阪大学教授 奥野良臣

花の便りで春は本番となり、燕の飛来が夏を知らせる。一方冬になればインフルエンザ、夏は日本脳炎となるのが疫病の歳時記である。

インフルエンザは今冬も派手に流行し、われわれの生活にもかなり大きな影響を与えたので皆さんの御記憶に新しいことと思うが、日本脳炎の方は近年患者発生が目立って減少してきた。この数年間は日本全国でも数十名以下、大阪府ではゼロに近付いた。この状態は終戦直後の惨状と比較すれば嘘のような話である。当時は発疹チフス、日本脳炎、コレラ等恐ろしい伝染病が沢山あった。大村先生（阪大名誉教授）の下で行われていた大阪府死因調査で伝染病の疑あるときは連絡を受けて解剖に立合った時、右の伝染病とメチル中毒死の屍が法医の解剖室に所狭しと置かれていて、畳の上で亡くなった普通家庭の老人、子供から路傍で行倒れの人達の脳から日本脳炎ウイルスが簡単に

分離できたものであった。

法定伝染病の中でも一時その恐ろしさは大将格であった日本脳炎も時代の変遷と共に非常に少なくなったので、本病はもはや重要性を失いつつあると見る人があるのは無理からぬことである。しかしこの数年間の事実だけで本病の恐怖は去ったと見てよいのであろうか。またワクチンの必要性も少なくなったのであろうか。

日本脳炎患者が減少した主な理由として、先づ最近の社会経済構造の変化の賜として、媒介者である蚊が少なくなったことをあげざるべきだとする考え方が支配的と見られるが、また一方ワクチンの普及のお蔭であると思われることもできると思う。毎年わが国で約三千万人近くもの人が日本脳炎ワクチンの注射を受けているのである。

分難できたものであった。法定伝染病の中でも一時その恐ろしさは大将格であった日本脳炎も時代の変遷と共に非常に少なくなったので、本病はもはや重要性を失いつつあると見る人があるのは無理からぬことである。しかしこの数年間の事実だけで本病の恐怖は去ったと見てよいのであろうか。またワクチンの必要性も少なくなったのであろうか。

んの話によると、消防の第一の目的と任務は火を消し止めることではなく、火災が発生しないように予防することである。伝染病についても、また他の疾病についても同じことが云えるであらう。日本脳炎の流行史を見ると、昭和十年に大流行があった、この年わが国の多くの研究者によつて日本脳炎は初めて学問的によく調べられ、ウイルスが分離され、当時嗜眠性脳炎、日本夏期脳炎、またはB型脳炎あるいは今日云う所の日本脳炎の病因が明らかにされた。その次の大流行は昭和二十三年であつて約五千名の患者が報告されている。そして昭和四十一年には大阪府としては記録的の三十四名の患者が確認された。その間かなりの起伏はあったが、増減を繰返しながら、十年から二十年近くの間隔で大流行に襲われているのである。従つて最近本病の発生が少いからと云つて、「のど元過ぎれば熱さを忘れる」ことがあつてはなるまい。

日本脳炎ワクチンは天野教授ら微研グループの努力によつて極めて精度が高くなり、従つて副作用については殆んど心配はないので、いま日本脳炎ワクチンの手綱を簡単に緩めてはなるまいと思う。

に合わせるのではなく、政策に合わせるようになっているのである。目前の流行を眺めては打つ手はないので、せめて妊婦の抗体調査だけでもとの希望に応えるため、私共の研究室では若い人達が検査に追い廻されている現状である。約十年前の沖縄の二の舞を演じなければよいがと思う。

同じことはムンプス（流行性耳下腺炎）ワクチンについても云える。この方は早くから研究が進み百歩近く有効で安全な立派なワクチンで、早く実用化するよう督促しつづけているがまだ基準すらできていない。更に最近世界に魁けてわが高橋博士らの開発した水痘ワクチンに至つては、外国では大いなる関心をもつて取上げられているが、わが国では当分全く見込がないと云う。いつ迄わが国は後進国に甘んじる気なのであろうか。速やかに脱却したいものである。

(S・51・3・10)

